

地縁組織の幸福に関する一考察

ー 連合自治会長へのアンケートからー

A Study on the Happiness of the Regional Organization

-From the questionnaire to the coalition self-government chairman-

大崎 洋 Hiroshi OHSAKI

概要

人は地域に住む人との〈つながり〉なしには生きていけない。地縁組織として大きな存在である自治会のこれからの活動を意義あるものにするために、論者の住む名古屋市北区楠地区の5学区（味鏡・西味鏡・楠・楠西・如意）の連合自治会長に対し、アンケート「連合自治会長への地域活動・幸福に関するアンケート（表2）」を本年10月に実施した。本稿は、その結果を基に地縁組織の幸福についてまとめたものである。

キーワード

幸福の核心
幸福の往還
お互い様の心
三～五人組
相互扶助
つながりの再編

目次

- 1 はじめに
- 2 幸福について
- 3 地縁組織について
- 4 地縁組織の再生について
- 5 まとめ

1 はじめに

「幸福」とは広辞苑には「みちたりた状態にあって、しあわせだと感ずること。」とある。「欲求が満たされたときの持続的な満足感」ともいえ、「幸福」は気分や感情の微妙な変化を含んだ幅広い意味をもつ言葉でもあり、その捉え方は人によって、また、年代によっても違う。

明年2018年に創立100周年を迎える「新しき村」を創設した、武者小路実篤(1885~1976)は「幸福は人生にとって最高のものではないであろう。しかし望ましいものである。」「幸福は、自分が大きな愛につつまれていると感じるときに起る

るもの」^(注1)といい、まさにその定義は様々である。

また、所得と幸福との関係について、心理学者であるブリックマンとキャンベルによる「所得や富といった生活の客観的状況を良くすることは、個人の幸福に何も影響していない」という研究成果が1971年に公表されてから、経済成長が人々の幸福に結びついていないのではないのかという議論が行われるようになり^(注2)、所得は幸福度にとって重要な要因であるが、所得が増えれば増えるほど幸福度も高まるという関係ではない^(注3)とされている。

2 幸福について

『幸福論』として主要なものにアリストテレス、ヒルティ、アラン、ラッセル、ショーペンハウアーの著作があるが、共通していることは、「物質的・金銭的に豊かな幸福」より「精神的な幸福」を、「利他的な幸福」より「人生の幸福」を追求している。

イギリスのジェレミー・ベンサム(1748~1832)は、「人生の目的は、幸福になることである。人は幸福になるために生まれてきた。幸福になることは、万人の人生の〈義務〉である。人は〈義務〉としてその人生において幸福にならなければならない。」^(注4)としている。

2.1 幸福の核心

多くの人々は、「幸福を一時的な状態（至高体験）は数秒で達成されるが、それと同じくらいの速さで消えてしまう状態」として捉えている。「日本の伝統精神のなかには、人の幸福などはかないものだ^(注5)」、「幸福は決して長続きしない」ともいわれる。しかし、最高の喜びという瞬間的な感情は確かに存在するが、幸福は違うはずである。真の幸福はより持続的な特徴を持っている^(注6)はずである。

また、幸福は外からやってくるのではなく、内から生まれる。そして努力を必要とする。前出の武者小路実篤は「人間は幸福になるには努力と根気と精神力がいり、注意が必要である。また人々と協力することが必要である。」^(注7)という。

アラン(1868~1951)は「幸福はつくり出すものなので、幸福になろうとしなければ幸福になれない。」^(注2)とし、アリストテレスは『ニコマコス心理学』で「至福なひと幸福なひとをつくるものは、一朝一夕や短時日ではない」^(注2)としている。

デール・カーネギー(1888~1955)は、その著『人を動かす』で人間の8つの欲求を挙げている。すなわち、「健康と長寿」、「食物」、「睡眠」、「金銭及び金銭によって買えるもの」、「来世の生命」、「性欲の満足」、「子孫の反映」、「自己の重要観」^(注10)である。これらの多くは幸福をかたちづくる基本的要素に対応した欲求といえる。

また、バートランド・ラッセル(1872~1970)は『幸福論』で、幸福の条件として、内面に関心を向けることこそが人を不幸にするという。人を不幸にするものとして「退屈と興奮」、「疲れ」、「ねたみ」、「罪

の意識」、「被害妄想」、「世評に対するおびえ」などをあげ、反対に、人を幸福にするのは外界への興味であり、「熱意」、「愛情」、「家族」、「仕事」、「私心のない興味」が不幸を阻止してくれるとしている。そして、「たいいていの人々の幸福に不可欠なものとして、「食と住」、「健康」、「愛情」、「仕事上の成功」、「仲間から尊敬されること」をあげている^(注11)。さらに「絶えず我がことばかりを考えるのを食い止めてくれるような愛情や興味を身につける心がけがなければならない」と指摘している^(注12)

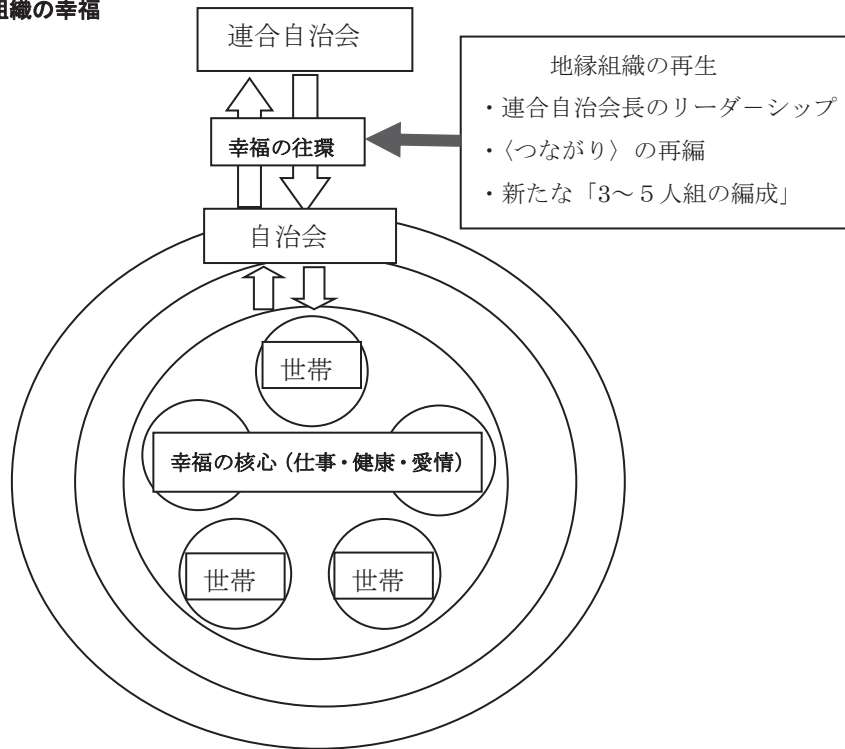
連合自治会長へのアンケート【Q26 一番幸福と思う（感じる）もの】の質問に対し、「個人の健康」、「家族の健康、幸せ」、「友達との付き合い」と答えているのが大半で、また仕事をしている連合会長は、「仕事」、すでに仕事をリタイアした会長は、「地域活動に参加」をあげている。【Q27 一番幸福に感じる時（時間）】について、全員が回答しているのは、「体調がよいと感じるとき」、「食事をしているとき」、「家族と過ごすとき」、「趣味（音楽・スポーツ・読書）をしているとき」をあげている。2名が「セックスをしているとき」というのは驚く。

多くの著書で、個人における幸福とは、まず「健康」、「仕事」、「愛情」が基本であるとも記されているが、まさしく今回のアンケートでもそのことが如実に表れている。

図1の「地縁組織の幸福」の最小単位が世帯（個人・家族）を表わすが、「健康」、「仕事（地域活動）」、「愛情（家族）」のバランスはそれぞれ個人差があるものの、この3つが〈幸福の核心〉といえるものである。

健康であり、仕事や活動が充実し、家族内が満たされていないと、目を地域に向けることはできないであろう。幸福に至る道は、全くのバラバラで何でもよいというものではない。生活に余裕があり、社会的交流に恵まれ、人生の意義や信念に支えられるという、一定の方向に向き、個人の人生にいくらかの安定があることが〈幸福の核心〉にとっての必要条件と思われる。

図1 地縁組織の幸福



2.2 幸福の往還

三木清(1897~1945)は『人生論ノート』のなかで、幸福についての中で次のように述べている。

機嫌がよいこと、丁寧なこと、親切なこと、寛大なこと等々、幸福はつねに外に現れる。歌わぬ詩人というものは真の詩人でない如く、単に内面的であるというような幸福は真の幸福ではないであろう。幸福は表現的なものである。鳥の歌うが如くおのずから外に現れて他の人を幸福にするものが真の幸福である。(註13)

人は社会的環境から離れて生きていくことはできない。これは属する社会の発展を経験することが個人の幸福の発展にも影響を及ぼすことを意味する。大多数の人々の最大利益が比較的守られている社会に住み、社会の発展が個人に利益をもたらすと確信している人は、より幸福を感じるだろう。

他人との関わりの中で幸福になるということは、多くの著書でも確認できる。今日では、幸福は完全に個人的なものであるという概念は一般的である。しかし、ウェルビーイングの歴史の研究を通して、幸福は共同的な体験であり、集団、社会と文明によって社会的に築かれるものであるとされ、人の幸福を決定する5つの要素として、「仕事の幸福」、「人間

関係の幸福」、「経済的な幸福」、「身体的な幸福」そして「地域社会の幸福」をあげている(註14)。

アメリカの女性作家ジェイン・ジェイコブズ(1916~2006)は「最も重要なものは、友人や知人、近隣との会話によるかかわり」(註15)とし、ジョン・スチュアート・ミル(1806~1873)は「自分自身の幸福でない何か他の目的に精神を集中する者のみが、幸福なのだ。他人の幸福、人類の向上、あるいは何か他のものを目標としているうちに、副産物として幸福がえられる」(註16)としている。

喜びを得るための最善の方法は、他者と一緒にいることである。満足のいく生活を送るために最も重要になってくるのは、社会的な要因である。実際に良い人間関係は、幸福な生活のための必要条件といえる(註17)。

前出のバートランド・ラッセルは、興味を外に向けて没頭することではじめて、幸福を実現でき、「幸福は、一部は外部の環境に一部は自分自身に依存している」とし、「自我と社会が客観的な関心や愛情によって結合されること」の重要性を述べている(註18)。

そして、幸福な人とは

①客観的な生き方をし、自由な愛情と広い興味をもっている人

②自分と社会とが客観的な関心や愛情によってつながっている人

としている。客観的な生き方とは自己没頭をやめ、主観にとらわれることなく外に興味を向けた生き方を指す。ラッセルはショーペンハウアーと違って、外部を獲得することを重視し、「仲間とつきあい、他人と協力することが普通の人間の幸福における不可欠の要素である」としている。自我と社会とが客観的な関心や愛情によって結合されていないとき、両者間の統合の欠如が生じる。幸福な人とは、こうして統一のどちらにも失敗していない人のことである^(注19)とする。

幸田露伴(1867~1947)は『努力論』において、人間として徳を積むことや真の知識を増やしていくことは人間の幸福の源泉とし、幸福の条件として、「惜福」、「分福」、「植福」をあげ、最も重要なのは「植福」であるとしている。植福とは、自分の力や感情、知恵などを使って、世の中に幸福をもたらす物や情趣、あるいは知識で貢献するということである。つまり、世の中の幸福を増進し育てる行為を植福という。植福をすれば、やがて自分が福を狩り取るときに、社会も福を狩り取ることができるという意味で、二重の結果を生むことになるとしている^(注20)。

連合自治会長へのアンケート【Q17 連合自治会長になってよかった点】は、「地域のためになっている」、「友達ができた」、「充実した時間が過ごせる」、「近隣の人との距離が縮まった」を回答し、目を外部に向けていることが窺える。また、【Q25 地域活動で地域の人と交流することで幸福感(充実感など)は得られるか】に対し、1名の「わからない」を除き、全員が「幸福感を感じる」と回答している。

ラッセルのいう、「外の世界に興味を持ち、また外の世界からも受け入れられることで幸福になれる」ということである。人間が社会的な生き物であり、他者とうまくつながっていれば、より幸福になるはずである。ほとんどの活動は、どんなに平凡であっても、他者が関わっているならば楽しくなると思われる。

「地縁組織の幸福」を考えたとき、個人・家族が幸福感を感じ、連合自治会長自らが地域活動に幸福感を感じるという視座にたてば、自我と地域社会を適切につなぎ、地域活動に関心を持ち、活動に参加・活動を主催・企画する人を増やしていくことの大切さに気付く。

地域にあっては、基本的にすべての住民が、できれば地域活動に参加して住民としての努めを果たし

ていきたいと願っていると推察される。若者、高齢者であろうと、身体が不自由な人であろうと、誰もがかけがえのない能力をもつ存在である。しかも、そうした能力を連合自治会全体のために発揮したいという欲求が充足された時に、自分自身の存在価値を認識し、幸福を実感できるのではないだろうか。

人は社会的環境から離れて生きていくことはできない。属する地域社会の発展を経験することが個人の幸福感に大きく影響するのではないだろうか。

〈幸福の往還〉はこのように、個人・家族と連合自治会の双方向が幸福に関心をもち、幸福という言葉が無理なく適切に行き交う〈幸福の往還〉というものが必要ではないだろうか。図1は連合自治会と自治会・世帯(個人・家族)の双方向の幸福の動きを〈幸福の往環〉として表したものである。

3 地縁組織について

「地縁組織」とは、住民が居住する地域内の土地やそれに関連する各種の生活条件の共同利用と管理を行い、さらに土地を媒介にして成立する人間関係やそのまとまり集団である地域住民組織の中核的組織としての町内会・自治会、コミュニティ組織を指す^(注21)。そして、「地縁による団体」とは「一定の区域に住所を有する者の地縁に基づいて形成された団体」(地方自治法260条の2①)とされ、町内会・自治会がこれに該当する。婦人会(女性会)、子ども会、青年団等の団体は含まれない。

町内会・自治会の存在意義等については議論のあるところであるが、町内会・自治会は「有志のボランティアで、やりたい人がやれる範囲のことをするのが基本」なので、行政の組織力に比べると社会的なサービスを行う存在としては、町内会・自治会のできることは限られている。しかし町内会・自治会でしかできないことは、地域活動を通じて「自分はこの地縁組織の一員であり、住みやすい・住んでよかった。」というコミュニティ意識、共同体意識を醸成することが最も重要と思われる。

共同体の本来的なものは労働組織・生産組織であり、生産力の発展によってそうしたものがなくなったところにいくつかの共同が存在していたとしても、それはもはや共同体という有機的結合体を意味するものではない^(注22)という指摘もあるが、地縁組織としての共同体は、アルフレッド・アドラー(1870~1937)の「人は一人では生きていけない。誰かと助け合いながら共同生活を営んでいる。それを共

同体といい、どの共同体も共通していることは、人と関わりながら、人間の基本的欲求を満たそうとしていることである。人間の幸福感は、人によって異なり主観的なものとするのが一般的な見解だが、しかし基本的欲求が満たされて喜びを感じる点では、みな共通していると思われる^(注23)ではないだろうか。

かつて、ベストセラーとなった堺屋太一の『組織の盛衰』には、「理想の共同体の条件は、まず第一に組織の目的と構成員の目的とが一致し、地域コミュニティは構成員の心地よさを追求することが究極の目的^(注24)とあるが、これこそ地縁組織の目指すべき方向ではないだろうか。

3.1 自治会

家族を大切に、地道に地域活動に取り組み、〈つながり〉の中で相互援助しあうことそのものが自治会活動における幸福の核心といえる。

しかしながら老若男女、地位や職業、主義主張など立場や考え方の異なる人たちが渾然一体となって暮らす自治会は、最も身近で日常的な環境であるが、人々が織りなす組織としては最も基本的で、しかも「意外に厄介な共同体」ではないだろうか。自治会は、組織やグループのようにシステム的に管理・統制することで成り立っているわけではなく、自治会員一人ひとりの「意識の高まり」に依存する部分が多いと思われる。

幸福度を高めるには、信頼の絆がつながり、互いを支え合う地域コミュニティの円滑化と活性化が必要であるが、地域社会の問題は、人々の理解や努力が必要であり時間を必要とすることが多い。

しかし、その意義や重要性を理解すれば、誰でもいつでもその活動に参加でき、全員参加でなくても1～2割ほどの自立的な「意識の高まり」出れば

十分に活発化の可能性があると思われる。そして、その背中を押すのが自治会長ではないだろうか。

論者の住む楠地区は名古屋市北区の北部に位置し、春日井市との隣接地域であり、5学区で構成されている。畑・水田が散在する住宅地であり、マンション・市営住宅が広がっている。かつては農業中心の地域であり、いわば名古屋の外縁である。名古屋人は一般的に保守的・排他的といわれるが、楠地区はその傾向が強く、住民を「地の人」「ヨソ者」と言い、モノやサービスの価格に極めて敏感でこの地域では、「お値打ち」（価格の割には得なこと）が最も重要な価値基準になっている。

主要都市でも高い加入率といわれる名古屋市の自治会加入率は、74.4%であるが、北区自治会加入率は81.3%であり、楠地区は北区とほぼ同じ加入率である。学区ごと多少の差はあるものの、自治会離れが言われて久しい中、その加入率は一定水準を保っていると思われる。

コミュニティ施策の主体はあくまで地域住民である。暮らしやすい地域に向けて、行政が支援していくことがコミュニティ施策の基本であるが、まず行政に頼らず自治会でできることを考えることが自治会活動の出発点である。秋祭りなどを通じて親睦を深め、人との〈つながり〉が、コミュニティとしての意識を深めていくことは、行政にはできない自治会の活動として意義のあるものではないだろうか。

前出のベンサムは快楽を最大化、苦悩を最小化し、社会にとって「正しい行為」とは、関係する人の幸福を増進する行為であるとし、「最大多数の最大幸福」を保障することにイギリス政府の最重要目標がおかれるべきだと言明した。功利主義といわれるものであり、「最大多数の最大幸福」を理想とする、この言葉が示すとおり、自分の幸福でも、他人の幸福でもなく、すべての人の幸福を目指す点が功利主義の大

表1 楠地区連合自治会

連合自治会 (小学校区)	世帯数	自治会加入世帯		加入率
		自治会数	世帯数	
味鋤	5,700	36	4,457	81.9%
西味鋤	2,323	19	2,120	91.3%
楠	5,112	17	3,691	72.2%
如意	2,053	9	1,840	89.6%
楠西	2,600	15	2,363	88.5%
計	17,788	96	14,471	81.4%

(平成28年4月1日現在 名古屋市総務局企画部統計課庶務人口担当)

きな特徴であり、『ハーバード白熱教室』のマイケル・サンデル(1953~)の批判^(注25)もあるが、経済活動を伴わない助け合いの精神が横溢した「最大多数の最大幸福」は、自治会が追求すべき適切な理念と思われる。

【Q20 連合自治会の課題】として、担い手の高齢化があげられているが、仕事をリタイアして間もない人をターゲットに、地道に活動に取り組むより他はないと思われる

3.2 地縁組織の現状・問題点

「イジメ」、「ひきこもり」、「虐待(DV)」、「うつ病」、「自殺」、「孤独死」など、このところクローズアップされることの多い社会問題は、1950年代半ばからの高度経済成長以降、人と人との関係が希薄になったことが背景にあり、それが「社会全体の責任」であることを、多くの人が気付いているのではないと思われる。「社会全体の責任」という大まかなことは理解しても、それでは「一人ひとりが何をすればよいか」ということになると答えを出すのは難しい。

日本人はどちらかといえば、自己主張の少ない、共存共栄のできる素晴らしい精神性を具備しており、日常的な社会秩序の多くを、人々の「和と善の心」によって維持・継承してきたといえる。一時は「世界に冠たる安全な国」といわれ、経済的な成功も含めた「日本神話」として大いにもてはやされた。その日本神話が成り立っていたのは、何か特別なシステムがあったからではなく、システムや法的制約では捕捉しきれない領域を世の中の裾野にあって見事に補完しあってきた人々の〈和と善の心〉があったからと見ることもできる。人々の「地域離れ」が、世の中に殺伐とした空気を生み出すだけではなく、明らかに「社会的連携の脆弱化」へとつながっている。また、それらは、和をもって貴しとする日本古来の伝統(日本人が日本人である証し)が今まさに壊れつつあることを告げる「警鐘」に他ならない

(1) 〈お互い様のところ〉の喪失

わが国では、日常的な社会秩序の多くを、地縁組織の中核である自治会・町内会を中心とした地域の仕組みが担ってきたが、そこには義務や罰則を含めた強制力はなく、常に住民の自覚に基づく協調性が求められている。これまでは、その多くを〈お互い様のところ〉という、世界に例をみない日本人のもつ素朴な精神文化によって維持してきた。それは、

「人として生きる上で最も基本的な規範を育む」という機能を備えた先人の知恵であり、永い伝統のなかで培われた歴史的経験則といえるものがある。

しかし、高度経済成長後半あたりから顕在化してきた「人々の地域離れ」は、結果的に〈お互い様のところ〉を大きく後退させることになり、かつての地域社会で機能していたバランス感覚も今や確実に薄れつつあるのが現状と思われる。日々の暮らしの場である地域社会のあり方については、何らかの形で自己調整機能を取り戻すために住民同士が互いに助け合うという意識の高まりが出てこなければ、ますます地域は衰退していく。かつては地縁組織のなかでも、無意識のうちに機能していた「ところ」の部分が、高度経済成長という劇的な変化の中では、会社や組織などのシステムに安易に移行してしまい、それまで地域社会にしっかりと根付いていた〈お互い様のところ〉は一気に薄れ、結果的には地域住民の道徳的意識までもが、薄れてしまったといえるのではないだろうか。

〈お互い様の心〉の基盤になるものは近所付き合いであるが、連合自治会長の目からみると、【Q16 近所付き合い5年前と比べると】は、「やや活発になった」という印象である。また、【Q15 近所付き合い】は、「たまに世間話や立ち話をする程度」という回答が多い。

民俗学者の宮本常一は『日本人のくらしと文化』のなかで「人間の持つ力というのは、いったい何だろうか。実は親から子へ、自分の持っているものをどう伝えていくかということにあるのではないのでしょうか。伝えられることによって、それがプラスされて高まって行くのであります。しかし、今はそういうふうになっているのでしょうか。」^(注26)と述べているが、先人が育んだ〈お互い様のところ〉の力を取り戻し、自助と互助にまつわるバランス感覚を地域社会に不可欠な共通認識としてハッキリと自覚し、それを「いかにして子や孫たちに次の世代にどうつなげていくか」をみんなで考える。それが、今を生きる私たちが引き受けるべき大切な役割であると思われる。

(2) 地域への無意識・無関心

地域社会は住民一人ひとりの「意識の高まり」に依存する部分が多い。地域社会という概念の大切な部分を、永い間、無関心で意識することなく無意識に通りすぎてきたのではないだろうか。

【Q18 より活発な自治会活動にするには】に対して、

「自治会に対する住民の関心や意識を高める必要がある」と全員の会長が回答している。また、【Q19 自治会員に対する情報発信】は3名の会長が「足りない」と回答している。

高度経済成長以降、地域社会における人と人との関係が希薄になりはじめたあたりから、世代が進むごとに、恥の文化は薄れ、人々の意識が組織というシステムの中に埋没してしまった結果、昨今の風潮として、何事においても「得になる」ことには関心を示すものの、身近で個人的な人と人とのつながりの中から生まれる恥の文化、つまり「徳になる」ことには関心を持たない人たちが、増えてきたのではないだろうか。

かつての地域社会における「人々の強い絆」というのは、その類いまれな歴史風土の下、日本というグループのなかであって、個人として特別に意識することもなく、人と人との関係性を維持・継承する「社会的受け皿」としての役割を、もろもろの社会的な習慣や仕組みのなかで、無意識のうちに受けついできたといえる。

住民が無関心なままに失いかけている社会的機能を、まずは意識の領域に引き戻す必要があり、それを地域社会の共通認識にしてゆくためには、地域社会のあるべき姿を普遍的なものとしてイメージできる、何らかの目標のようなものが必要である。地域は、「子供たちが成長する大切な場である」とか「一人暮らしの高齢の人を見守る」、「人と人とのつながりを維持継承する役割」など、機能不全状態に陥りつつある事柄を一つひとつ検証し、その意義と重要性をしっかりと理解していくことが肝要で、それこそが「新たな地縁組織づくり」に不可欠な作業と思われる。

そして、かつての地域社会にあった濃密な人間関係や慣習を、そのまま復活させるのではなく、まずは日々の暮らしのなかで最低限必要と思われる住民意識を少しずつでも取り戻し、もっと地域に関心をもとうとする姿勢を呼び起こし、さらに地域住民が地域活動に参加することに幸福感を見出すことができれば、もっと自治会活動も活性化されるのではないだろうか。

【自由記述意見】に、困っていることの手助けとして、「蜂の巣の除去」、「高齢者宅のゴミ出し」、「電球の取り替え」等身近なことを実施している連合自治会の活動は手本となるものである。

(3) 地域社会からのひきこもり

【自由記述意見】に「若い世代の参加が少ない」、「社会全体が若い世代の地域活動に参加できる余裕がない」、そして【Q20 連合自治会の今後の課題】には、「若者を各種行事に参加させる事が急務」とあったが、若い人も含めて地縁組織の諸行事への参加が少ないという現象は、やや極端ではあるが、〈地域社会からの引きこもり〉ともいえる現象といえるのではないだろうか。

地域社会の側から見れば、効率や利潤を優先する非日常的競争社会の渦中に入り込んでしまった人たちの行動こそが、少し厳しい表現ではあるが、人と人とのつながりを基本とする地域社会からの「ひきこもり」であると見ることもできる。

「社会的ひきこもり」とは、「6ヶ月以上自宅にひきこもって社会参加しない状態が続いている」と定義^(注27)されるが、「引きこもり社会」とは

- ①賃金労働者が多数派で、収入や社会的階級などが平均化し「人並み」とか「みんなと同じようにしなければ」というプレッシャーが強い社会、
- ②郊外へ住宅地が広がり、旧来の地域社会のつながりが薄れ、雑然とした「居場所」がなくなってしまった社会、
- ③高度成長期をひた走ってきた60代以上の親世代と、その価値観を受け入れられない若者たちが断絶した社会^(注28)、である。

職場において、働きかた改革や非正規雇用、成果主義に追われる子育て中の若い世代の人たちに、日々の暮らしの場である地域社会を自らの心の居場所として参加してもらうのは大変である。小さな意識改革を一つひとつ積み上げていき、かつての「古きよき時代」といわれた時代の中から、今の時代に必要と思われる部分を取捨選択し、それを少しずつ今の時代に取り戻していこうとする地道な作業は困難を伴うが、誰かがどこかで始めなければならぬ大切な課題である。地縁組織においてその先頭に立つのは、自治会長である。

4 地縁組織の再生について

京極純一は『政治意識の分析』において、日本人の行動様式の一つの特徴としては問題解決のために人々と協力して対処することに消極的であり、正当な理由があっても争うことを嫌って「和」を大切にするという「非結社性、反闘争性」があると指摘している。^(注29)

「日本人の意識調査」において、地域に住民の生活

を脅かす問題が発生した場合、①あまり波風を立てずに解決されることが望ましいから、しばらく事態を見守る《静観》②この地域の有力者、議員や役所に頼んで、解決をはかってもらう《依頼》③みんなで作民運動を起し、問題を解決するために活動する《活動》で、最近の5年間では《静観》が増え、(40年間で32%から37%)、《活動》が大きく減少(40年間で36%から16%)している。すなわち、地域で問題解決に取り組む姿勢が消極的になったと考えられる。^(注30) 地域での問題を解決するための、コミュニティ意識・お隣さん意識を育てることは、自治会にしかできない。かつての地域社会にあった濃密な人間関係や慣習を、そのまま復活させるのではなく、まずは日々の暮らしのなかで最低限必要と思われる住民意識を少しずつでも「取り戻してゆこう」とする姿勢が望まれる。地域の再生で肝要なことは、システム的に「世の中を変える」のではなく、人々の意識が少しずつ高まってゆく過程のなかで知らぬ間に「世の中が変わる」という、まさに「地域社会であればこそ可能なアプローチ」ではないだろうか。

4.1 連合自治会長のリーダーシップ

地域における人と人との関係を維持・継承してゆくためには、人々の意識の高まりが不可欠であり、その中心的な役目を果たするのが連合自治会長である。生き方や価値観も違う人間が、同じ地域で暮らしつつ、幸福とは何か、どのように協力して生きていくことができるのかという課題を追求するのは自治会長のリーダーシップに他ならない。

5学区の連合自治会長【Q1~5 プロフィール】について、年齢は70歳以上が3名であり、居住年数は40年以上が4名である。世帯構成は夫婦だけの世帯、子どもがいる核家族等様々であるが、その地域に長く居住し、人生経験も豊富で地域の信頼が厚い人が連合自治会長を務めていることが窺える。

【Q17 連合自治会長となりよかった点】は、「地域のためになっている」、「友達ができた」、「充実した時間が過ごせる」、「近隣の人との距離が縮まった」、「毎日が勉強になった」と一様にその活動に意義を見出している。

アンケートから、【Q20 連合自治会の今後の課題】は「担い手の高齢化」、「若い世代の参加」、「情報伝達と共有化」をあげている。【Q22、23 NPOとの連携・活動】に関しては捉え方が様々である。【Q24 今後の連合自治会の役割】は「地域内の住民の親

睦を深めること」、「地域の問題への自主的な取り組み」があげられている。

次に、地縁組織のコミュニティ・リーダーである連合自治会長に必要な資質として、

- ①立場や肩書きはどうかであれ、一地域住民として、人間らしい生活の場としての地域を考えたとき、日常的に問題意識をもち、周囲の人に問題を投げかけ、共通の問題として考え合うような努力がみられること。
- ②地域に本拠地をおき、多様な個性と能力をもつ人々相互の生きた交わり(交流)を組織し、場合によっては学習・教育の場や機会をつくったり、「地区白書」づくり、「コミュニティ・マップ」づくりなどの具体的な行動が始められていること。
- ③地域の人々が当面している問題と自分が直面している問題とを結びつけて捉え、地域課題の具体性と客観性とを統一しようとする努力がなされていること。

などがあげられている。^(注31) まさに前出の堺屋太一著『組織の盛衰』にある「衆・目の一致する公平性と安住感をもたらす人物こそ、共同体のリーダー」^(注32) である。

4.2 〈つながり〉の再編

日本文化は「自律の文化」ともいえるものであり、日本人は人間関係における信頼を大切にし、つながりあう関係性の中で自分の生き方を律する生活をしてきた。和辻哲郎(1889~1960)は『倫理学』において、人と人との間柄の基礎となる信頼について述べている。^(注33) 日本の地域社会では、人と人との〈つながり〉を大切なものとして、永く維持・継承してきた。高度経済成長期以降、激しい人口移動、その結果としての過疎や過密、そして、新興住宅地や集合住宅の増加など、人びとを取り巻く環境は大きく変化した。人びとの地域離れが起き始めたあたりから一連の社会的慣習が次々と崩れはじめると、地域社会、とりわけ居住する地域内の人と人との関係までも薄れてきた。その中で、気軽な、あるいはあっさりした関係を望む人が増えた。^(注34)

そして、地域における問題の核心は、会社の組織のなかで機能する人々は増えたものの、人と人の〈つながり〉を基本とすべき地域社会が、今や機能不全へと向かいつつある世の中の空気感である。

ところが、先の熊本地震の避難所では、日頃からの住民同士のつながり意識がよって、町内会・自治

会を中心とした「お隣さん意識」や近所で助け合う「近助の力」が発揮された。

【Q20 連合自治会の課題】として、「巨大地震の備え」があげられていたが、住民同士がつながり、声を気軽に掛け合えるような関係があれば、防災・防犯でも、最近問題となっている認知症患者の見守りについても、地域の課題解決において応用が利くのではないだろうか

かつての地域社会にあった濃密な人間関係や慣習を、そのまま復活させるのではなく、まずは日々の暮らしのなかで最低限必要と思われる住民意識を少しずつでも取り戻してゆこうとする姿勢を呼び起こしていくことが「地域の再編」につながり、さらに地域住民が地域活動に参加することに幸福感を見出すことができれば、もっと自治会活動も活性化されるのではないだろうか。

4.3 新たな「三～五人組」の編成

無政府主義者であるピョートル・クロポトキン(1842~1921)は『相互扶助論』の中で、「もともと人間は共同し合い相互扶助を行わなければ生きられないのだから、国家がなくなればその本性が現れる」、「人類の道徳的進歩においては、相互的闘争よりも相互扶助の方が主役を勤めていると断言することができる」、「単なる他助は『慈善』だが、自助でもある他助は、『慈善』ではなく『連帯』なのである。そうした関係が成り立っているところにおいては、他人を助けるのは自分のためでもあるのだ。そこでは他人を助けようとする者のみを他人は助けてくれるからだ。そこでは、自分だけを助けようとする者を他人は助けてくれないのだ。そこには、協同なくして自律はない場所なのだ。同時に、そこには自律しようとするれば協同が生まれる場所なのだ。他人のためにすることが自分のためにもなるという関係が互いに成り立っているような社会的関係のもとでは、「自分のため」=利己と「他人のため」=利他とが対立しあわずに両立する局面が支配的になる。その関係は、相互主義の関係である。この相互的自助、連帯しあう自助が相互扶助なのだ。」^(注35)とした。わが国においても、現在でも楠地区のごく一部の神社関係者では、伊勢神宮参拝のための「講」を維持しているが、相互扶助の精神を見直し、「講」のようなものを社会に再導入を検討することができないのだろうか。

隣人共同体の典型的な例として、かつて“五人組”

の制度があった。

『米沢藩伍什組合掟書』(穂積陳重編『五人組法規集 p342』)によれば

一、五人組は常にむつまじく交わりて、苦楽を共にする事、家族のごとくなるべし。

一、十人組は時々したしく出入て、家事をも聞事、親類の如くなるべし。

一、一村は互に助合、互に救合ふの頼母しき事、朋友の如くなるべし。

一、組合村は患難に当て互に助て、隣村よしみの甲斐あるべし。^(注36)

と記されている。

さらに、『五人組制度新論』によれば、農村五人組の特性を

- 1 五人組は少人数の団体
 - 2 五人組は家族を単位とする団体
 - 3 五人組は近隣家族の結合
 - 4 五人組は組員が生活の全領域に亘り協力する生活共同体
 - 5 五人組は部落の下級単位団体^(注37)
- としている。

大正・昭和期の婦人運動活動家の山川菊栄(1880~1980)は、その著『わが住む村』に昭和11(1936)年鎌倉で「五人組」について組内で共同で茅を刈ったり、お墓の穴掘りをやったことが著されている^(注38)。

かつての連帯責任や相互監視といった目的ではなく、助け合う精神の横溢した「五人組」の制度を見直し、江戸時代からの〈向こう三軒両隣り〉という言葉にある通り、今の時代に合わせた自治会内で組織成よりも小グループの新たな「三～五人組」を組織化することが喫緊の課題ではないだろうか。いきなりの編成では、地域内では抵抗も多いであろう。〈向こう三軒両隣〉の「近助」のあり方を念頭におき、まずは、災害発生時時、隣同士声を掛け合い避難所まで一緒に行くということから始めていけば、地域の人たちには受け入れやすいと思われる。むろん、マンションや集合住宅の人たちを引き入れるのは相当困難であるが、当面まずは戸建ての自治会員の人たちから進めていきたい。

5 まとめ

人は社会的環境から離れて生きていくことはできない。属する社会の発展を経験することが個人の幸福の発展にも影響を及ぼすことになるのではないだ

ろうか。この視座にたち、「町内会・自治会」という身近な地縁組織の幸福を考えたとき、地域の現状を理解し、自我と地域を適切につなぎ、地域活動に関心をもち、活動に参加する人を増やしていくことの大切さに気付く。地縁組織の幸福論の要は、今の時代を考慮した「つながりの再編」にある。

形骸化の一途をたどりつつある地域社会の現状が、最終的に「人と人とのつながりを基盤とした幸福な地縁社会」に変わらなければならない。地域社会には、子育て中の女性をはじめ、専業・兼業・協業を含めた主婦層、定年後地元で生活する高齢者、地域の行政や教育に関わる先生や自治体関係者、そして若者をはじめ比較的身近な環境で働く人たちも含めれば、変革に必要な人材は自治会には十分存在する。

地域社会がよりよい方向に変わってゆくには、何よりも「日々生活する身近な環境こそが大切」と自覚した上で、互いに気楽に語り始め、日々の暮らしを基盤とする社会について、本来の在るべき姿に近づこう、一人ひとりが〈幸福の往還〉を念頭において活動することではないだろうか。

付記 1

各連合自治会に対し、自治会員 100 名ずつのアンケート調査をお願いした。その結果をまとめ、さらに地域の幸福研究を深めていきたい。

付記 2

本研究にあたり、5人の連合自治会長にはアンケートに応じて頂き、自治会活動に関する多くのコメントを頂き、心より感謝申し上げます。

表 2 連合自治会長への地域活動・幸福に関するアンケート

【プロフィール】	
Q1 年齢	61 歳～65 歳:1名 66 歳～70 歳:1名 71 歳～75 歳:3名
Q2 職業	自営業:1名 アルバイト:1名 無職:2名 その他(連合会長)
Q3 世帯構成()内に同居人数	夫婦だけの世帯:2名 子どものいる核家族(3人):2名、(5人):1名
Q4 この地域での居住歴	30 年～40 年未満:1名 40 年以上:4名
Q5 住まい 戸建て:	5名
【地域の子育てへの環境・協力】	
Q6 お住まいの地域に、子育て家庭に対して理解し、協力する雰囲気があると感じますか？	・大いに感じる ・感じる ・普通:2名 ・あまり感じない:3名・全く感じない
【買い物の利便性】	
Q7 お住まいの地域での買い物・お出かけなど交通の便が良いと感じますか？	・大いに感じる ・感じる:2名 ・普通:3名 ・あまり感じない・全く感じない
【まちの魅力】	
Q8 お住まいの地域は学区外から人が訪れたい魅力のあるまちだと思いますか？	・大いに感じる:1名 ・感じる ・普通:3名 ・あまり感じない:1名 ・全く感じない
【心のバリアフリー】	
Q9 お住まいの地域には、困っている人を見かけた時に、声を掛けたり協力したりしやすい雰囲気があると感じますか？	・大いに感じる ・感じる:4名 ・普通:1名 ・あまり感じない ・全く感じない
【地域への愛着】	
Q10 お住まいの地域の文化や特色に愛着や誇りを感じますか？	・大いに感じる ・感じる:2名 ・普通:3名 ・あまり感じない ・全く感じない
【防犯性】	
Q11 お住まいの地域で、防犯への不安を感じますか？	・大いに感じる ・感じる:2名 ・普通:1名 ・あまり感じない:2名 ・全く感じない
【交通安全性】	

Q12 お住まいの地域で、自動車や自転車などの交通事故の危険を感じますか？

- ・大いに感じる:1名 ・感じる:1名 ・普通:1名
- ・あまり感じない:2名 ・全く感じない

【災害時の絆・助け合い】

Q13 災害時に近隣の人と助け合う関係があると感じますか？

- ・大いに感じる ・感じる:2名 ・普通:3名

- ・あまり感じない ・全く感じない

【防災性】

Q14 お住まいの地域は災害に強いと感じますか？

- ・大いに感じる:1名 ・感じる ・普通:1名

- ・あまり感じない:2名 ・全く感じない:1名

【近所付き合い】

Q15 あなたは近所の人とお付き合いは次のどれに近いですか？該当するものに○をつけて下さい

- ・相談や助け合い(生活面で日用品の貸し借りや相談など)ができる程度:2名

- ・たまに世間話や立ち話をする程度:4名

- ・顔を見れば挨拶する程度:1名

- ・ほとんど付き合いがない (複数回答あり)

【近所付き合い5年前との比較】

Q16 近所の人とお付き合いは5年間くらい前と比べて活発になりましたか？

- ・活発になった ・やや活発になった:4名

- ・あまり変わらない:1名 ・あまり活発になっていない

- ・活発になっていない。

【連合自治会長として①】

Q17 連合自治会長となり、よかった点は何ですか？

- ・地域のためになっている:2名 ・友達ができた:2名

- ・充実した時間が過ごせる:2名

- ・近隣の人との距離が縮まった:2名

- ・その他(毎日が勉強と思っている) (複数回答)

【連合自治会長として②】

Q18 より活発な自治会活動にするには何が必要でしょうか？該当するもの全てに○をつけて下さい。

- ・自治会に対する住民の関心や意識を高める:5名

- ・活動への参加者を多くする:3名

- ・新旧の住民の交流を図る

- ・集合住宅との交流を図る:1名

- ・若手自治会員を連合役員に登用する

- ・情報伝達をよくする

- ・未加入世帯を少なくする:2名

- ・自治会活動は活発であり必要に感じない

【連合自治会の情報発信】

Q19 あなたの連合自治会の自治会員に対する情報発信は十分だと思いますか？

- ・十分である:1名 ・足りない:3名 ・わからない:1名

【連合自治会の課題】

Q20 あなたの連合自治会の今後の課題は何だと思いますか？該当するものすべてに○をつけて下さい。

- ・担い手の高齢化:4名 ・活動資金の不足:2名

- ・役員を同じ人がやっている:1名

- ・情報伝達と共有化が不十分:3名

- ・自治会員の意見が反映されにくい

- ・女性が参加しにくい

- ・新しい地域課題に対応できない ・特にない

- ・その他(巨大地震への備えが不十分(飲食物・家具固定等若い世代が参加、活動できない社会、若者を各種行事に参加させる事が急務)

【連合自治会の今後の活動】

Q21 今後、あなたの連合自治会が力を入れるべき活動をすべて選んでください。

- ・親睦活動(祭り・暑気払い・新年会等):2名

- ・地域清掃:1名 ・防災活動:4名 ・防犯活動:5名

- ・交通安全活動:5名 ・健康に関する事業:2名

- ・募金活動:1名 ・災害弱者マップの作成:2名

- ・独自広報の作成:1名 ・住民からの苦情の調整:1名

- ・会員への情報提供:3名 ・スポーツ活動:1名

- ・高齢者支援:4名 ・子育て支援:5名

- ・バザーなどの収益活動:1名 ・リサイクル活動:1名

- ・小・中学校との連携:3名 ・その他()

【NPO との連携①】

Q22 連合自治会は、地域の諸課題を解決するうえで、NPO などの市民団体との関係についてどのようにお考えですか？

- ・連携して活動していきたい:3名

- ・独立して活動したい:1名 ・どちらでもない:1名

【NPO との連携②】

Q23 同じ地域で活動するNPOなどの市民団体と活動を連携していくうえで、問題がありますか。当てはまるものすべてに○をつけてください。

- ・連携していない:2名

- ・連携に対する問題は特にない:2名

- ・役割分担の方法 ・費用負担の問題

- ・考え方の相異:1名

- ・連携に対する地域住民の理解不足

- ・その他(NPO そのものが信用性がない)

【今後の連合自治会の役割】

Q24 次にあげる中で、今後の連合自治会の役割として重要なものはどれか。主なものを3つまでお答え下さい。

- 地域内の住民の親睦を深めること:4名
- 地域における生活環境の維持管理:1名
- 地域の問題への自主的な取り組み:4名
- 市町村に対する協力
- 市町村への要望や働きかけ:3名
- その他()

【幸福感①】

Q25 連合会長となり、地域活動でお住まいの地域の方と交流することで幸福感(充実感など)が得られていると感じますか？

- 感じる:4名
- 感じない
- 何とも思わない
- わからない:1名

【幸福感②】

Q26 あなたにとって一番幸福と思う(感じる)ものはなんですか？大切なものを5つ選び()内に順位をつけてください。

	A会長	B会長	C会長	D会長	E会長
仕事が発見すること				5	
健康であること	1	2	2	4	○
お金があること					
夢が実現すること	4	3			○
家族の健康、幸せ	2	1	1	3	
友達との付き合い		5	3	2	○
地域活動への参加	3		4		○
ボランティア活動(地域活動を除く)への参加					
仕事があまくいくこと				1	
趣味(音楽・スポーツ・読書等)が発見すること		4	5		○
欲しい物が手にはいること	5				

【幸福感③】

Q27 あなたにとって、一番幸福に感じるとき(時間)はいつですか？大切なものを10選び()内に順位をつけてください。

	A会長	B会長	C会長	D会長	E会長
仕事をしているとき				1	
体調がいいと感じるとき	6	7	1	1	○
食事をしているとき	7	6	7	9	○
料理をつくるとき					
掃除をしているとき					
入浴をしているとき		5	8	10	○
何もしないでボーとするとき		9	5	8	
睡眠のとき	8			7	
セックスをしているとき		4		6	
買い物をしているとき					○
お酒を飲むとき		8			
カラオケをするとき			7		○
友達と過ごすとき	5		3	4	○
家族と過ごすとき	3	2	2	3	○
お金が貯まっているとき		10			
趣味(音楽・スポーツ・読書)をしているとき	9	1	4	5	○
誰にも邪魔されず一人で時間を過ごすとき	10	3	6		
他人に親切にしたとき(他人にお金・時間を使うことも含む)	1				
各種パーティ・イベントに参加するとき	4				○
宗教活動に参加するとき	2				
通勤時間中					
電話をしたり、携帯電話を触っているとき					

【自由記述】(原文のまま)

- 1 現在、連合自治会で行っている特色ある活動や特に工夫していること、新たに実施している取り組み等
 - 自治会内で困っている事を手助けすることを現在行っています。約1年経過しました。(例)蜂の巣をとったり、大ゴミの排出の手助け、電気玉のとりかえ etc
 - NPOとタイアップして、防災マップ作りを現在しています。来年に全体の防災訓練をやって完成となります。
 - 各自治会の参加率が悪くなってきている。防災・高齢化・少子化等で相互協力の必要性が言われる中、どうすれば参加意識を高めていくかが課題である。
 - コミセンニュースの全戸配布
 - 広報誌の取り組み
 - 連合自治会各行事に対するアンケートの実施
- 2 地域全般に関することで困っていること。
 - 社会全体が若い世代の地域活動に参加している余裕がない。参加したくても参加できない。
 - 若い世代の参加が少ない。地域の方がどうしても心良く参加してもらえるか？
 - 自治会参加率アップ
 - 各行事への参加率アップ

注

- (1) 武者小路実篤『私の人生論』日本ブックエース 2010 p229
- (2) 日本GNH学会『GNH研究2』芙蓉書房 2014 p36
- (3) レオ・ボルマンズ編 藤井誠二訳『世界の学者が語る幸福』西村書店 2016 p30
- (4) 西尾孝司『ベンサムと幸福論』晃洋書房 2005 p1
- (5) 佐伯啓思『反・不幸論』新潮新書 2012 p8
- (6) レオ・ボルマンズ編 藤井誠二訳『世界の学者が語る幸福』西村書店 2016 p331
- (7) 武者小路実篤『私の人生論』日本ブックエース 2010 p272
- (8) アラン 神谷幹夫訳『幸福論』岩波文庫 1998 p303
- (9) アリストテレス 高田三郎訳『ニコマコス倫理学上・下』岩波文庫 1971
小川仁志『仕事・人生に迷ったらアリストテレスに聞いてみよう』2014 p48
- (10) D.カーネギー 山口洋訳『人を動かす』創元社 1999 p34
- (11) パートランド・ラッセル 安藤貞雄訳『ラッセル幸福論』岩波文庫 1991
- (12) 小川仁志『100分de名著 ラッセル幸福論』NHK出版 2017 p84
- (13) 三木清『人生論ノート』新潮文庫 1954 p2
- (14) レオ・ボルマンズ編 藤井誠二訳 前掲書 p253
デレック・ボック 土屋直樹訳『幸福の研究』東洋経済新聞社 2011 p268
- (15) 田中理恵子『平成幸福論ノート』光文社新書 2011 p216
- (16) 朱牟田夏雄訳『ミル自伝』岩波文庫 1960 p128
- (17) レオ・ボルマンズ編 藤井誠二訳 前掲書 p17
- (18) パートランド・ラッセル 安藤貞雄訳 前掲書 p266
- (19) パートランド・ラッセル 安藤貞雄訳 同上書 p268
- (20) 幸田露伴『努力論』岩波文庫 1940 pp53~86
《惜福》は、福を使い果たしたり、取り尽くしてしまわないこと。《分福》は、自分の得た福を他人に分け与えること。
- (21) 山崎丈夫『地縁組織論』自治体研究社 1999 p16
山崎丈夫『地域コミュニティ論—域分権への協働の構図』自治体研究社 2003 p79
- (22) 宮本由輝『柳田國男の共同体論』御茶の水書房 1978 pp386~387
「労働組織・生産組織としての機能が失われているところに本来の共同体はありえないと考える。信仰をめぐる共同体というのはそうした本来の共同体の属性としての機能の一部であり、もはやそれのみしか存在しないというのは本来の共同体が実態を失って形骸化している状況を示しているのであって、それを軸にしての共同体の再興はありえない」とする。

- (23) 岸見一郎『アドラー 人生を生き抜く心理学』NHK ブックス 2010 p114
A・アドラー著 岸見一郎訳 野田俊作監訳『個人心理学 講義 生きることの科学』一光社 1996 p2
- (24) 堺屋太一『組織の盛衰』PHP 文庫 1996 pp112~114
- (25) マイケル・サンデル 鬼澤忍訳『これから「正義」の話をしよう』早川書房 2010 pp48~51
- (26) 宮本常一『日本人のくらしと文化』河出文庫 2013 p57
- (27) 斎藤環『ひきこもり文化論』ちくま学芸文庫 2016 p54
- (28) 志賀靖二『地域社会改造論』日本地域社会研究所 2013 p144
- (29) 京極純一『政治意識の分析』東京大学出版会 1968pp67~68
- (30) NHK放送文化研究所『現代日本人の意識構造[第8版]』NHK ブックス 2015 p93
「日本人の意識調査」は、NHK放送文化研究所が全国の16歳以上の国民約5400人を対象に1973年(昭和48年)から5年ごとに実施している調査、最終調査は2013年
- (31) 東海自治体問題研究所『コミュニティ活動入門』自治体研究者 19
- (32) 堺屋太一 前掲書 pp115
- (33) 和辻哲郎『倫理学(二)』岩波文庫 2007 第2章 第6節「信頼と真実」
- (34) NHK放送文化研究所 前掲書 p197
- (35) ピョートル・クロポトキン 大杉栄訳『相互扶助論』同時代社 2017 p320~336
- (36) 和辻哲郎 前掲書 p274
- (37) 西村精一『五人組制度新論』岩波書店 1938 p1

参考文献

- ・青山拓央『幸福はなぜ哲学の問題になるのか』太田出版 2016
- ・アリストテレス 牛田徳子訳『政治学』京都大学学術出版界 2001
- ・アリストテレス 山本光雄訳『政治学』岩波文庫 1961
- ・岩井俊憲『アドラー心理学入門』かんき出版 2014
- ・岩崎信彦編『町内会の研究』お茶の水書房 1989
- ・岩中祥史『名古屋学』新潮文庫 2000
- ・内山節『共同体の基礎理論』農文協 2010
- ・NHK「幸福学」白熱教室制作班『「幸せ」について知ってみたい5つのこと』中経出版 2014
- ・小川仁志『ポジティブ哲学』清流出版 2015
- ・紙屋高雪『どこまでやるか、町内会』ポプラ新書 2017
- ・キャロル・グラハム 多田洋介訳『幸福の経済学』日本経済新聞出版社 2013
- ・神野直彦『分かち合いの経済学』岩波新書 2010
- ・J.S ミル著 塩尻公明・木村健康訳『自由論』岩波文庫 1971

- ・ 銭廣雅之『「地域」の哲学』北樹出版 2004
- ・ ソニア・リュボミアスキー 金井真弓訳『幸せがずっと続く 12の行動習慣』日本実業出版社 2012
- ・ 竹内靖雄『経済思想の巨人たち』新潮文庫 2013
- ・ 田中重好『地域から生まれる公共性—公共性と共同性の交点』ミネルヴァ書房 2010
- ・ 辻中豊・ロバート・ペッカネン・山本英弘『現代日本の自治会・町内会』木鐸社 2009
- ・ 鳥越皓之『地域自治会の研究』ミネルヴァ書房 1994
- ・ 中田実『これからの町内会・自治会』自治体研究社 1981
- ・ 中田実『地方 分権時代の町内会・自治会』自治体研究社 2007
- ・ 広井良典『コミュニティを問い直す』ちくま新書 2009
- ・ フィリップ・スコフィールド 川名雄一郎訳『ベンサム功利主義入門』慶應義塾大学出版会 2013
- ・ ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』書籍 工房早山 2007
- ・ マークス寿子『日本人はなぜここまで壊れたのか』草思社 2006
- ・ 前野隆司『幸せのメカニズム』講談社現代新書 2013
- ・ 松本健一『共同体の論理』第三文明社 1978
- ・ 三木清『哲学入門』岩波新書 1940
- ・ 宮川敬之『和辻哲郎—人格から間柄へ』講談社 2008
- ・ 山川菊栄『わが住む村』岩波文庫 1983
- ・ 山崎丈夫『地域コミュニティ論—域分権への協働の構図』自治体研究社 2003

（原稿受理年月日 2017年12月7日）